ケータイ小説とリテラシー：言語イデオロギーの視点から

西 村 由 起 子

要　旨

本稿は，2007年頃を中心に文芸評論家から批判を受けていた「ケータイ小説」を分析対象として，言語人類学で研究されている言語イデオロギーの視点から，書き言葉に関する言語使用者の意識を浮き彫りにする。ケータイ小説は印刷出版された既存小説と比較して，形態素解析に基づく文体特徴においては会話的特徴が地の文にまで拡大している点，一行における文字数が遙かに少ない点，さらに教科書コーパスを基に開発された日本語テキスト難易度分析から，既存小説よりやや低い，中学１～２年相当の難易度である事が示される。低めの難易度と話し言葉に典型的に見られる断片的な文体が，「未熟」とされる要因となる。これらが，言語イデオロギーの背後にあることを示し，日本語の書き言葉及び文芸言語をめぐる，絡み合う言語イデオロギーを論じる。

I　はじめに

移動通信技術が人々の生活・行動・社会全般に及ぼす影響は，近年コミュニケーション研究，文化研究，社会学等，幾多の分野で幅広く研究されている。例えばKatz and Aakhus（2002）では，欧米，アジア10カ国におけるモバイル通信の社会的，文化的影響を明らかにしている。初期のモバイルコミュニケーション研究においてRheingold（2002）は特に日本に焦点を当てており，また日本に関する研究ではIto *et al*（2005）がこれまでの日本での移動通信研究成果を英語圏の読者に伝えている。さらに記号学者により移動通信研究が行われ（日本記号学会編2005），松田美佐ら（編）（2006）はIto *et al*（2005）に続く進展を報告している。ケータイ上で用いられる言語に焦点を当てた研究では，三宅（2005a）はケータイメール上の言語特徴を明らかにし，また三宅（2005b）はポライトネス理論を用いて，ケータイメールによる対人関係管理に関する研究を行っている。さらに山崎（2006）は日本の大学生の間でのモバイルコミュニケーションにおいて，メールログの会話分析を行っている。

このようにケータイコミュニケーションが幅広く研究されてはいるが，日本の移動通信上で行われるある活動が学問的研究対象としては見過ごされてきた。それはケータイ上で創作・配布され読まれるケータイ小説である。ケータイ小説は2007年頃をピークに一世を風靡したが，多方面から厳しい批判を受けてきた。書き言葉としての日本語の基準だけでなく，文学的基準に照らしても批判の対象となり，多くの小説家や文芸評論家は，ケータイ小説は「未熟」（『國文學』2008）と捉えている。本稿では，ケータイ小説と紙媒体の既存小説との比較分析により，言語・文体上の類似点と相違点を明らか

にし，またそのような厳しい批判の背後にはどのような言語イデオロギーがあるのかを探る。

言語イデオロギー研究(例えばKroskrity 1999)では，言語とはどうあるべきものか，について人々が抱いている考え方を捉えようとするが，日本社会での言語イデオロギーがケータイ小説の受容において重要な役割を果たしていると考えられる。「言語イデオロギー」とは，Silverstein(1979： 193)は“sets of beliefs about language articulated by users as a rationalization or justification of perceived language structure and use.”と定義している。松木(2005：2)では，言語イデオロギーとは，「特定の言語に関する価値観であり，その言語コード，言語構造，言語使用をめぐる意識的，無意識的な考え方を総称するもの」としており，本稿でもこの意味で用いる。

ケータイ小説の問題は，書き言葉と関連の深いリテラシー(literacy)の問題にもつながる。それは，一般には「識字能力」,「読み書き能力」を指すが，それだけでなく，その背後には，書き言葉とはこのようでなければならない，という価値観が内在している概念である事を指摘しておく。本稿では言語イデオロギーの中でも，「リテラシーイデオロギー」を扱い，「日本語の書きことばはいかにあるべきか，に関する日本語使用者の意識的，無意識的に抱いている考え方」とする。

リテラシーイデオロギーの探求において，Barton（1994：169)のコンセプトを採用するが，Bartonは「リテラシーを文学からみる見方は文学研究から来ており，文芸作品に関する「カノン」（規範）の概念が含まれている」，としている。シラネ(1999，2009)による日本文学におけるカノン形成に関する歴史的論考をふまえ，日本において書き言葉はどうあるべきか，文学作品はどうあるべきか，という二種類のイデオロギーがどのように関わりあっているのかを論じる。また日本におけるケータイ小説の現象は，モバイルデジタルメディア上の言語に関する欧米の論考（例えばThurlow 2006，Tagliamonte and Denis 2008）とどの様に関わっているのかについても触れる。

II　ケータイ小説の背景

日本のケータイは，他国には類を見ない高機能を誇り，その普及率も20代人口の90％以上，30-40代及び10代の約90％がケータイユーザーであり，更に，ケータイの94.2％は，インターネットアクセス可能である(総務省2009)。若者には必需品であるケータイ上で時間や場所の制約から解放され，ケータイ作家は執筆している。2010年第４回ケータイ小説コンテストの第１位受賞者，繭は「ペンや紙なしでケータイに書くのは容易なこと」と述べている(2010)。読者も容易に作品にアクセスできる。ケータイ小説の多くは，作家がアップロードし，読者がダウンロードできる「図書館」を提供するウェブサイトに掲載されている。例えば”魔法のｉらんど”（http://ip.tosp.co.jp/index.asp）は2008年６月現在600万人の登録ユーザーを誇り(国立国会図書館2009)， 2010年３月３日の時点で，この図書館は，ロマンス，コメディ，ファンタジー，ミステリー，ホラーなど多岐にわたるジャンルで長編，中編，短編あわせて136699ものタイトルを掲載している。ケータイ小説ファンの人気投票で高順位にランクされた作品は，印刷媒体でも出版され，中には，ミリオンセラーも含まれ，映画，テレビドラマ，コミック等の原作となるものもある。

最初のケータイ小説は，2000年にYoshiと呼ばれる個人のウェブサイトに掲載され，その小説，

『Deep Love』は，女子高校生や若い女性の間で人気をよび， 2002年には，印刷版シリーズの売り上げ累計270万部を記録した（七瀬 2006）。2007年には，文芸セクション上位10作品のうち５タイトルがケータイ小説であった（トーハン 2007）。この時点で，主流メディアも驚異的な人気を無視できず，このブームについて，NHKは「クローズアップ現代」で全国放映を行っている（NHK 2007）。海外メディアもこの現象を伝えている（Katayama 2007; Onishi 2008; Goodyear 2008; Galbraith 2009）。2008年には，『文學界』と『國文學』においてケータイ小説についての特集が組まれている。ケータイ小説は現代の若者文化の一部（速水 2008）と考えられ，印刷版ケータイ小説の売上は減少しているものの，ケータイ小説サイトにアップロードされたタイトルは増加を続け，“魔法のｉらんど”広報担当の野口は，「ケータイ小説は，安定した読者層に幅広く読まれている」と述べている（2010）。

その驚異的な成功と人気にもかかわらず，ケータイ小説は厳しい批評を受けており，それらは以下のように集約される。(a)平易な漢字を多用した言語は未熟で，訓練に欠ける経験の浅い作家の執筆による，(b)小説は，大多数が使い古されたプロットを持ち，恋愛，セックス，暴力，レイプ，不治の病，薬物使用，自殺などの似通った事柄を扱う，(c)物語は人物や設定の精緻な記述なしに急速に進行し，構造的にあまりにも単純である，(d)そのスタイルは，空白行の多用など，標準的な小説の文体・表記を逸脱している。

では，誰がケータイ小説を書き，読み，サポートしているのか？ ごく少数のプロ作家を除き，ケータイ小説の書き手は，大多数がアマチュアで，必ずしもプロを指向していない。佐々木（2008）は主要ケータイ作家10人にインタビューし，その多くが素人で，10代後半から20代前半の女性であることを記している。一方，読者は，インターネットアクセスのあるユーザーなら誰でも読むことは可能だが，その印刷版の読者から，読者層を推測できる。日本学校図書館協会と共同で実施された毎日新聞社による2009年度『読書世論調査』では，2008年には女子中学生の75％，女子高校生の86％がケータイ版，印刷版を問わずケータイ小説を読んだ経験があると報告している（毎日新聞社 2009）。このような読者にとって，ケータイ小説が人気を博す理由の一つには，扱っている主題が挙げられる。佐々木（2008）によると，作品は通常，家族や学校等の日常生活に起こる個人的経験に基づいていると作家は述べ，同年代の読者も自分の現実と重ね合わせ，その登場人物に共感を覚える，としている。これらの小説が実際に著者自身の「本当」の経験に基づいているかどうか疑わしいが（速水 2008），読者は物語が現実であるかのように知覚することになる。深く感銘を受けた読者は，既にケータイ上で小説を読んでいるにもかかわらず，記憶にとどめ置く記念として形のある印刷版を購入し（杉浦 2008），それがミリオンセラーを生み出す背景となる。

ケータイ作家は通常の伝統的な印刷媒体の作家よりも，読者からフィードバックを遙かに頻繁に受け取ることに注目する必要がある。ケータイの基本的機能はメッセージの交換で，そのような交換が読者・作家間で行われ，読者が作者に賞賛のメッセージを送信することは驚くに当たらない。ケータイ作家も，読者によって励まされている，と述べている（繭 2010）。時には，読者の要求に応じ，プロットも変更されることがある。このように作家と読者の間には親密な関係があり，この種の「共同制作」はケータイ小説の重要な特徴である。さらなる特徴として読み手と書き手の間には「仲介人」

が不在であることも挙げられる。編集や「監督」する大人は介在しないので，大人には不適切と思われる言語表現やテーマが編集者により編集されることはなく，書いたとおりストレートに読者に届く（吉田 2008）。

Ⅲ　ケータイ小説と既存小説との違い：言語，スタイルおよび難易度

魔法のｉらんど図書館や他の同様のサイト上に掲載された13万を超すケータイ小説から，最もよく知られている，人気の高い７作品を詳細にみることにする。この選別基準は，ケータイ小説賞の受賞記録，印刷版の売り上げ記録とファンの人気投票による。７作品のタイトルとその著者（すべて女性作家）等は，以下の表１に示されている[1]。

表1：ケータイ小説データ一覧

	著者	タイトル	発行年	分析ページ	備考
1	十和	『クリアネス』	2006	1-269（全）	「第1回日本ケータイ小説大賞」第1位作品
2	美嘉	『恋空』	2006	1-200	ベストセラー
3	メイ	『赤い糸』	2006	1-200	ベストセラー
4	Kiki	『あたし彼女』	2008	1-430（全）	「第3回日本ケータイ小説大賞」
5	ユウ	『ワイルドビースト』	2008	1-200	サイト連載時　読者投票1位
6	パープル	『あしたの虹』	2008	1-100	瀬戸内寂聴著、連載時、読者投票1位
7	繭	『風にキス、君にキス』	2009	1-309（全）	「第4回日本ケータイ小説大賞」第1位作品

これらケータイ小説７作品を，国立国語研究所編纂による『現代日本語書き言葉均衡コーパス（略称 BCCWJ）』モニターバージョン（2009）から選択された88の（印刷）小説サンプルと比較した。本研究でケータイ小説と比較のために使用された既存小説は，ケータイ小説が最近若い年代の著者により書かれていることから，なるべく若い作家による最近の作品，という方針で BCCWJ から以下の方法で収集した。まず，BCCWJ 書籍サンプル情報より，書籍の NDC コード913（小説）とされた2640サンプルを選んだ。次にサンプル情報の C-コードにより，第１桁目が「８」である児童書は除外し，更に，第３・４桁目が，93（日本文学，小説・物語）以外の作品は除外した。その結果，最も若い1980年代生まれの作家による作品は８サンプル全て（2004,2005年発行），1970年代生まれの作家による作品は，2003年以降に発行の32サンプル，1960年代生まれの作家による作品は，2005年発行の48サンプル，合計88サンプルを選択した。

必要に応じて，ケータイ小説と既存小説のデータは，実際の話し言葉との相違点をみるため，西村（2010）で分析された話し言葉コーパスと比較された。この研究では，小説の中で著者が物語を展開している部分と，引用符等で囲まれた，作者により構築された会話部分を区別している。小説家は登場人物の会話を創作する際，話し言葉らしさ orality（Lakoff 1982）を組み込んでいると考えられ，この引用部分（会話）と地の文（会話以外の部分）を分けることは，両者は特徴が異なることから，文体分析（樺島・寿岳 1965）では広く採用されている方法である[2]。本稿では以下の分析における枠組みとして用いている（表７の文字列の長さを除く）。

ステップ1：言語分析

最初に二種類の小説全体に対して，地の文と引用部分別に品詞分布を比較分析した。その過程において，日本語形態素解析プログラム「和布蕪」と，電子辞書，Unidic[3]を，各形態素の品詞を決定するために使用した。各形態素は，名詞，動詞，助動詞，助詞，代名詞，形容詞，副詞，連体詞，接続詞，感動詞の10のカテゴリーに分類された。品詞に基づく分布は下記の表２に示すように，ケータイ小説と既存小説の間には，全体として大きな差はみられなかった。

表２．ケータイ小説・既存小説における地の文・引用文別形態素分布：　品詞全体

	ケータイ小説			既存小説		
品詞	引用文(Q)	地の文(N)	計	引用文(Q)	地の文(N)	計
名詞	20.2%	23.5%	22.8%	20.8%	24.7%	23.6%
接辞	3.3%	2.5%	2.7%	3.7%	2.9%	3.1%
動詞	13.6%	16.2%	15.7%	13.8%	16.5%	15.8%
形状詞	1.3%	1.7%	1.6%	1.2%	1.6%	1.5%
連体詞	0.8%	1.0%	1.0%	1.2%	0.9%	1.0%
接続詞	0.4%	0.3%	0.3%	0.3%	0.4%	0.4%
助詞	31.1%	33.0%	32.6%	33.5%	33.2%	33.3%
助動詞	14.6%	12.4%	12.8%	13.7%	12.3%	12.7%
代名詞	4.7%	3.4%	3.7%	4.1%	2.4%	2.9%
形容詞	3.2%	2.7%	2.8%	2.6%	2.2%	2.3%
副詞	3.1%	2.9%	3.0%	3.1%	2.6%	2.7%
→ 感動詞	3.6%	0.4%	1.0%	1.9%	0.2%	0.7%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%
形態素数	52602	207784	260386	80491	208490	288981
Q・N割合	20.2%	79.8%	100%	27.9%	72.1%	100%

しかし，会話的特徴の指標となる感動詞のカテゴリーでは，顕著な違いを示している。ケータイ小説の引用部分（3.6%）では，既存小説の引用部分（1.9%）の２倍に近い頻度で感動詞が使用されている[4]。

ケータイ小説の会話的特徴を示すこの傾向は，助詞の下位区分で更に顕著である。助詞はその種類により機能が異なり，この中で注目すべきは，聞き手に対して話者の態度を示す終助詞である。下の表３は，ケータイ小説と，既存小説の引用文と地の文について助詞の種類(下位区分)の分布を示している。

引用文は，どちらの小説でも（再）創作された会話を描いているが，ケータイ小説の引用文における終助詞の頻度（23.6%）は，既存小説での引用文における終助詞の頻度（14.3%）よりはるかに高

表３．ケータイ小説・既存小説における地の文・引用文別形態素分布：　助詞下位区分

	ケータイ小説			既存小説		
助詞	引用文(Q)	地の文(N)	計	引用文(Q)	地の文(N)	計
格助詞	30.8%	53.7%	49.3%	40.4%	56.9%	52.2%
係助詞	12.2%	15.1%	14.6%	14.4%	16.2%	15.7%
接続助詞	18.1%	17.3%	17.5%	16.6%	16.9%	16.8%
準体助詞	6.7%	3.7%	4.3%	6.7%	3.6%	4.5%
副助詞	8.6%	6.1%	6.6%	7.5%	4.7%	5.5%
→ 終助詞	23.6%	4.1%	7.8%	14.3%	1.7%	5.3%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%
形態素数	16373	68546	84919	26966	69290	96256
Q・N割合	19.3%	80.7%	100%	28.0%	72.0%	100%

い。西村（2010）で明らかにされているが，実際の日常会話での終助詞の頻度は，23.5％で，ケータイ小説における引用文の終助詞の頻度（23.6％）は，実際の会話の場合とほぼ同水準である。さらに，ケータイ小説における終助詞の頻度は，地の文においてさえ4.1％で，既存小説では1.7％であるのとは際だって高い数値となっている。

ケータイ小説が実際の対面会話に近いことを更に示す傾向は，助動詞の下位区分においても見られる。表４において継続の助動詞，「―テル」,「―デル」に注目されたい。

表４．ケータイ小説・既存小説における地の文・引用文別形態素分布：助動詞下位区分

	ケータイ小説			既存小説		
助動詞	引用文(Q)	地の文(N)	計	引用文(Q)	地の文(N)	計
ダ	35.8%	31.7%	32.7%	36.5%	32.2%	33.5%
タ	24.4%	41.7%	37.7%	22.4%	44.1%	37.6%
ナイ	10.7%	10.2%	10.3%	9.1%	7.1%	7.7%
デス	5.1%	0.7%	1.7%	8.9%	1.4%	3.7%
マス	2.9%	0.4%	1.0%	5.4%	2.4%	3.3%
レル・ラレル	2.7%	4.9%	4.4%	3.9%	6.5%	5.7%
→ テル・デル	10.0%	4.2%	5.6%	5.5%	0.5%	2.0%
チャウ	1.2%	0.5%	0.7%	1.1%	0.1%	0.4%
ベシ（文語）	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.2%	0.2%
その他計	7.1%	5.7%	5.9%	7.1%	5.5%	6.1%
計	100%	100%	100.0%	100%	100%	100.0%
形態素数	7690	25754	33444	11063	25642	36705
Q・N割合	23.0%	77.0%	100.0%	30.1%	69.9%	100.0%

「―テル」,「―デル」は，例えば「食べてる」,「飲んでる」のように，動作の継続を表す助動詞である。これらは,「食べている」,「飲んでいる」の「イ」が脱落した短縮形で，省略された「イ」は，インフォーマルなレジスターの指標となっている。表４では，引用部分はどちらも創作された会話であるにもかかわらず，これら縮約された助動詞は，既存小説では頻度が5.5％であるのに，ケータイ小説では，ほぼ倍の10.0％となっている。これは，実際の日常会話で観察された頻度（10.7％）に非常に近い（西村 2010）。作品登場人物のカジュアルな会話で,「イ」が脱落した助動詞が使われている事は驚くに当たらないが,注目すべき点は地の文におけるケータイ小説での頻度(4.2％)と既存小説における頻度(0.5％)との大きな差である。

標準的ワープロソフトを使用してパソコン上で書く際に「―テル」と,「―デル」を使用すると，スタイルチェッカーは「い抜き」表現として，書き言葉には不適切，との警告を発する。ケータイ上で執筆の場合は，入力方式が異なるため，このような警告には遭遇しない。このことから，物語を語るときにも，ケータイ作家は，カジュアルでインフォーマルなレジスターを組み込む一方，既存小説の作者は「不適切な」「イ」を回避することで，主に書き言葉の標準に従っているようである。ケータイ小説は，引用文だけでなく地の文でも短縮された助動詞を採用している事が明らかになり，このことは，文体や文の難易度分析の結果とともに，後述する。

ステップ2：文体分析

ケータイ小説・既存小説の文体分析にあたり，文が終了している文末表現と，一文や一行の文字列

の長さに関して比較する。文末表現の分析では，完結文か断片文か，を区別する。完結文とは，相や時制を表す述語が文末に置かれている文を指し，断片文とは，文の一部分で終了しているフラグメントで，述語を持たない文を指す[5]。また，文字列の長さは，一文の長さと一行の長さを分けて分析する。一文の長さは，文の開始から句点（。）まで 句読点を含む全角文字数により測る[6]。一行の長さは，著者が文を書き連ね，意図的に「リターンキー」が押され改行するまでの文字数に基づき計測される。具体的に下の(1)では『恋空』，(2)では『赤い糸』のケータイ小説，および(3)では既存小説（サンプルID　PB39-00445 松岡裕太著『キミに可愛がられたいい』(2003)）から，完結文・断片文の例を挙げ，一文及び一行の文字カウントがどのように行われたか記す。

(1)　a）帰り道
　　b）電話が鳴った。

(2)　時には迷い，時には間違いながら... ...。

(3)　天井を見つめながらまだボーッとしている頭で首を傾げるが，まったく見覚えのない部屋だった。固いパイプベッドに仰向けに寝かされているせいで背中が痛い。

（1a）には，文末を示す際に用いられる句点がなく，（1b）に続いていると解釈される。（1b）の「鳴った」は，述語動詞，「鳴る」に，過去・完了の助動詞の終止形「―た」で文が終わり，句点も使用されているので，（1a）（1b）あわせて，述語を持つ完結文といえる。この完結文の文字数は（1a）で３文字，（1b）で句点（。）まで含め７文字，合計10文字（全角）から成ると数えられる。ただし，この完結文は意図的改行を含むので，行数としては二行を占めていることになる。(2）は，文末に句点があるにもかかわらず，継続助詞，「―ながら」で終わり，述語を持っていないため，断片文とみなす。この断片文の文字列数は，Microsoft Wordのワードカウントシステムでは，省略記号の３つのドットを１つの全角文字としてとらえるため，句点まで含め18文字の長さとカウントされ，行数は一行となる。(3)は，２つの完結文（「―だった」，「痛い」の終止形で終了しており，述語を持ち，句点も使用されている）で構成され，第一文は44文字，句点後の第二文は29文字から成る。この抜粋は，文の数では二文であるが，行数としては，第二文が終了するまで改行が行われていないので，一行とカウントする。

両者の文体の相違点と類似点を明らかにするうえで，完結文と断片文をさらに詳細に見ることにする。具体的には，寿岳(1979)に倣い，述語が，用言の終止形等で終了している完結文と，それ以外の形（体言止め，連体止め等）で終了している断片文の割合を，引用文と地の文に分けて調べる。実際の対面会話において断片的な発話が多く発生することから(Chafe 1982)，一般に引用部分に多くの断片文がみられることは想像に難くない。その結果を表５に示す。

表５から，引用文，地の文共に，ケータイ小説では既存小説より多くの断片文が用いられているこ

表5:ケータイ小説・既存小説における地の文・引用文別の文末表現: 完結文と断片文の割合

文の種類	ケータイ小説		既存小説	
	引用文(Q)	地の文(N)	引用文(Q)	地の文(N)
完結文	24.4%	67.1%	36.0%	87.0%
断片文	75.6%	32.9%	64.0%	13.0%
断片文中　体言止めの割合)	14.7%	12.8%	8.2%	4.4%
計	100%	100%	100%	100%
完結文・断片文　合計	8546	14430	8731	13315
引用文:地の文　割合	37.2%	62.8%	39.6%	60.4%

とがわかる。断片文の中でも体言止めについては，引用部分では，既存小説では8.2%であるのに対して，ケータイ小説の引用部分ではでほぼ倍に近い14.7%である。断片文のうち，体言止めで終了する文は，既存小説の地の文では，4.4%のところ，ケータイ小説での頻度は12.8%で，ほぼ3倍に近い。このことから，ケータイ小説では，より会話スタイルに近い断片的な会話が引用文で構築され，会話ではない地の文でさえも，相や時制に関わる述語を欠いた文末表現が用いられている傾向があることがわかる。

文の長さを測るに当たり，英語では語数を基準にする場合が多いが，語と語の間にスペースを入れない日本語の正書法では一語の認定に議論を呼ぶこともあり，語数を文の長さの判定には用いず，上述したように本稿では文字列の長さを用いる。文字数のカウントには，句点（。）読点（,）も1文字として含まれる。完全文，断片文を総合した一文あたりの文字数は，ケータイ小説，既存小説の両方で引用文，地の文を区別し集計した結果が表6に表されている。

表6. ケータイ小説・既存小説における地の文・引用文別文の長さ比較:一文あたりの平均文字数

	ケータイ小説			既存小説		
	引用文(Q)	地の文(N)	計	引用文(Q)	地の文(N)	計
文字　総数	98670	333445	432115	152831	372307	525138
文(完結文・断片文計)総数	8546	14430	22976	8731	13315	22046
一文あたりの平均文字数	11.5	23.1	18.8	17.5	28	23.8

さらに，文だけでなく，ケータイ小説と既存小説の間で一行の長さがどのように異なるのか，に関しては，作家が意図して行った改行に基づき行数をカウントした結果を表7で示す。「一行」とは既存小説では一段落を指すことになり，この中には引用文と地の文を共に含んでいる場合があるので，ここでの分析では文を引用文・地の文とする区別は行っていない。

表7. ケータイ小説・既存小説における一行の長さ比較

	ケータイ小説	既存小説
総文字数	432115	525138
改行数	23796	10728
1行あたりの平均文字数	18.2	49

表6から，全体として，一つの文は，既存小説よりもケータイ小説において約5文字程度短いことがわかる。引用文・地の文の違いについてみれば，引用文で地の文より約10文字程度短い傾向は，ケータイ小説，既存小説とでは，大幅に異なるものではない。しかしケータイ小説と既存小説との違いは，表7においては顕著に示されている。一行あたりの平均文字数において，既存小説では，段落を形成す

るために伝統的なレイアウトを採用し，改行までの一つの行において多くの文字（49.0文字）を使用している。一方，ケータイ小説でははるかに少なく，18.2文字である。ここで一行の定義は，印刷紙面上の行ではなく，著者が意図して改行を入力した時点までの平均文字数であることを思い起こされたい。表６と表７を併せ，ケータイ小説では一行に平均約18文字が用いられ，この長さは平均的な一文の長さにほぼ等しいことも判明した。

既存小説では，改行は通常，新しい段落の開始を意味する字下げにより記され，その段落には複数の文を含む事が多い（上の例(3)参照）。これと対照的に，ケータイ小説では，単一文でさえ複数行に分割することが行われ（上の例(1)参照），その結果，非常に頻繁に新しい行を生み出す事となる。ケータイ小説でのスタイルは，散文ではなく詩の一節，またインスタントメッセージやオンラインチャットで用いられる構造に非常に近いと言える[7]。

ステップ3：難易度分析

本稿での難易度分析には，Sato *et al*（2008）によって開発され「帯」と命名されたプログラムを用いた[8]。日本の教科書コーパスに基づき作成されたこのプログラムは，ケータイ小説・既存小説が，どの程度の学年レベル相当の難易度で書かれているかを判定することができる。日本の教科書では義務教育で学年ごとに教える漢字を選定し，検定により厳格に施行しているため，使われている文字の種類，割合によりこのプログラムで学年レベルの難易度を推計できる，というものである。このプログラムは，難易度として，１から13までのいずれかの値を出力し，アウトプットの値は，それぞれ次のような学年を意味する。

1—6：小学（１年—６年），７—９：中学（１年—３年），10—12：高校（１年—３年），13：大学

英語圏で単語のスペリングがリテラシーとの関連で議論されることと類似して(Sebba 2007)，日本での漢字使用が語彙の知識と関連して論じられ，ケータイ小説批評家がケータイ作家の漢字使用に言及することは，驚くことではない。Sato *et al*（2008）によって開発された「帯」によるケータイ小説と既存小説の難易度の分析結果を，引用部分と地の文に分け，下の表８に示す。

表８．ケータイ小説・既存小説における難易度：　推計される相当学年

	ケータイ小説			既存小説		
学校教育での相当学年	引用文(Q)	地の文(N)	全体	引用文(Q)	地の文(N)	全体
	5.857	7.71	7.71	6.682	8.7	8.2

表８は，ケータイ小説と既存小説の，学年相当難易度の差を示している。引用文と地の文の両方を含むケータイ小説７作品の平均難易度は7.71で，これは中学１年後半程度と解釈され，既存小説88サンプルの平均難易度は8.2で，中学２年前半程度と解釈される。差としては，半学年程度，ケータイ小説の方が低いと考えられる。地の文では，差はわずかに大きくなり，１学年程度となるが，主に漢字の使用による難易度分析では，ケータイ小説は，既存小説と比べて際だって大きく異なっている，とは

言えない。

以上３種類の分析結果は以下のように要約される。言語特徴による文体分析では，ケータイ小説・既存小説は，大幅に異なっているわけではないことを示している。既存小説は典型的な書き言葉との共通点が多いのに対して，ケータイ小説では，会話的なスタイルが好まれていることが明確である。最も顕著な違いは，一行あたりの文字列の長さにある。既存小説では，一行平均49文字を使用しているが，ケータイ小説では，一行は平均18文字で構成されている。難易度分析において半学年から１学年程度低い学年レベルの漢字を含む文が用いられていることがわかり，ケータイ小説は，既存小説とはそれほど異なっていないことが明らかにされた(9)。

Ⅳ　絡み合う二つのイデオロギー

ケータイ小説に対する批判に戻り，その根拠や動機を考えてみる。ケータイ小説に対する否定的評価は，二つの，異なるが絡み合っているイデオロギーから導かれていると考えられる。シラネ（1999）は，日本文学史を俯瞰し，過去千年以上の間，日本の支配者層の「言語」教育のために「文学」作品も含め使用されてきたこと指摘し，更にシラネ(2009)は教育が国民全てに行き渡るようになった太平洋戦争後でさえ，「カノン」，つまり規範となるテキストはそれぞれの時代の政治・社会・文化的状況に適した作品がカリキュラム開発者の意思により選択され，学校教育カリキュラムでは文学作品に重点が置かれてきた，としている(2009：15-21)。この流れは今日に至るまで続いている。ケータイ小説に対する批判のうち，「簡単な漢字を使った未熟な言語」と「標準的散文の文体からの逸脱」に言及する部分は，リテラシーイデオロギーを具現するもので，「詳細な記述のない雑なストーリー展開」と「陳腐なテーマ」についてのコメントは文学としての規範に関わっているものと思われる。以下ではまず前者から論じてゆく。

１．リテラシーイデオロギー

文芸批評家や作家によるケータイ小説への厳しいコメントは「良い」書き言葉の伝統的な考え方に基づいている。この事に関して現代の「専門家」がどのように述べているかを検討してみよう。岩淵（1980）は辞書編集者でもあり，国立国語研究所所長もつとめた著名な言語学者で，あまりにも多くの改行は，「段落なしに等しい」として悪文の重要な特徴であると主張している（1980：50）。さらに，ジャーナリスト･作家である本多（2004）は，述語で終わらず体言止めの文に関して，「第一級の文章家は決して体言止めを愛用することがありません。」(206）と述べ，その様な文は，「体言止め（より広くは中止形）の文章は軽佻浮薄な印象を与えます。」としている（208)。最後に，日本人･外国人大学生に作文を教え，作文マニュアルの著者でもある石黒（2004）は，話し言葉と書き言葉の文法は異なるもので，話し言葉と書き言葉の違いに常に意識するよう警告している（2004：101-5)。実際に，話し言葉と書き言葉の間に顕著な差は，日本語の大きな特徴であると考える言語学者もいる（例えばネウストプニー1981：231)。このような発言はケータイ小説批判にとってその根拠を与えるものとなる。ケータイ小説で使用される言語には，専門家が書き言葉として悪いとみなす要素―頻繁な改行，

述語のない体言止めの文，明らかに口語的な断片文の数々—を備えている。また，易しい漢字の使用は，実際よりも大きく認識され，新メディア小説の「素人」的なイメージに貢献している。

ではなぜ，ケータイ小説家は，未熟・貧弱と解釈される言語とスタイルで書くのであろうか？ ケータイ小説では，地の文でさえも，会話体が好んで使われている。Clancy（1982）は日本語の書き言葉で終助詞等の口語特徴が用いられない理由として，作家と読者が互いを知らないため，社会的に遠い存在であることを挙げている。それに比べると，ケータイ小説の作者・読者間には，社会的な遠さという前提が成立しない場合がある。インタビューに見られるように，ケータイ小説家は，非常に読者に近く，また読者は同輩として作家と密接に関わり合っている。おそらく，ケータイ小説の会話スタイルは，この緊密な書き手/読み手関係の結果生み出されるもので，また，このような関係を作り出すためにも用いられている，と言えるのではないか。

「悪文」の要素に関しては，ケータイ小説がどのように作成され流通しているかを思い起こしてみよう。ケータイ小説は，編集者や出版社などの仲介者から干渉を受けることなく（ウェブサイト経由で）直接読者に到達する。これらはサイトに投稿され，迅速かつ自由にダウンロードされる。印刷で出版される既存小説は，読者に到達するまでに時間のかかる編集プロセスを経る。花井（2005）はティーンエイジャーのため口語スタイルによる小説を出版しようと試みたが，その際の編集者との軋轢を述べている。アマチュア作家の作品は，第三者により「訂正」されることなくインターネット上に出現し，読者に直接語りかけるだけでなく，直接著者の考えも表現している。

第一章☺笑顔☺

「あ〜！！超お腹減ったしっ♪♪」

待ちに待った昼休み。
美嘉はいつものように
机の上でお弁当を開く。

学校は面倒。

だけど同じクラスで仲良くなったｱﾔとﾕｶと一緒にお弁当を食べるのが唯一の楽しみなのだ。

ー田原美嘉ー

今年の4月高校に入学したばかりの高校一年生。

入学してからまだ
三ヶ月足らず。

仲良しで気の合う友達も出来て結構楽しく過ごしていた。

チビだし
バカだし
特別かわいいってわけでもないし
特技なんてないし
将来の夢なんてあるわけもない。

高校に入ってすぐに染めた明るい茶色のストレート髪。
ほんのりと淡いメイクがまだあまり馴染んでいない今日この頃。

図１：『恋空』本文１ページ

ケータイ小説の特定スタイルを説明する上で，明白な技術的要因がある。長い文では，読むためにはスクロールを必要とするため，小さなケータイ画面には収まらない。従って読みやすくするために文が画面に収まるよう，一文を区切って短くする，等の編集が行われる。一行もケータイ画面に合わせた文字数になるよう変更されることがある。下の図１では『恋空』の最初のページを提示しているが，18文字前後の一行は，ケータイのディスプレイに適合する長さであることが解る。また，図１に見られる頻繁な改行は，小さなケータイのディスプレイでも見やすく，コンテンツにより近づきやすくするためのものである。これはまた，複雑な漢字が避けられる理由の一つといえる。ケータイ小説における言語の選択は，意図的なユーザーニーズや技術的な制約に関わり，言語表現は，ケータイ技術によって，拡大も制限もされているのである。

2.「カノン」変遷からみた小説と文学イデオロギー

次に日本の文学史におけるカノン形成の文脈において，ケータイ小説の批判の根底にある文学イデオロギーを考える。Shirane（2000： 2）は Guillory（1993）の論考に則して，カノンに関して，“canon … means those texts that are recognized by established or powerful institutions.”と述べている。日本文学におけるカノン形成のプロセスに関して，8世紀以来，政治・社会的な要因に応じて日本語および中国語の文学作品が宗教書，歴史書とともにカノンに登場し，消えていった事を明らかにしている。個々の文学作品だけでなく，詩や小説などの文学ジャンルがカノンの地位を与えられたり否定されたりしている事も指摘している。明治維新後，日本は欧米諸国に追いつこうとしたが，この事が日本文学カノンに影響を与えている。小説というジャンルは，それまでカノンではない低いステータスにあったが，カノンとして権威があるジャンルに引き上げられた。この傾向は，太平洋戦争後に強化され，シラネ（1999）は，このように述べている。「戦後の国語カリキュラムの最も顕著な特徴は，近代の（多くの場合ヨーロッパに基礎をおく）文学の概念，特に「小説」が，カノンの形成にあたって支配的な役割を果たした事である」（シラネ1999：432）。今日でも，権威ありと認められた正統のジャンルとして，「小説」に価値が置かれていると言える。主流作家や編集者は，文学の訓練や経験を持っていないと考えられているケータイ作家によって，彼らの「重要な」領域が侵略されているかのように感じたかもしれない。印刷版ケータイ小説の驚異的な売上げによって反感，憎悪が加速されたとも言える。ケータイ小説がオンラインでのみ読まれ，印刷版が発行されていなかったとしたら，厳しいコメントは発せられず，文学界主流に身を置く人々は，このデジタル小説によって脅かされた，とは感じなかった可能性がある。しかし，シラネ（2009）と Ensslin（2006）はともに，カノンとは緩やかなパラダイムシフトの過程で政治的，社会的，文化的な変革を経て変わりうるものであることと述べている。競合するカノンが出現する現代においては特に，周辺にあった大衆文化が上昇する様から，いつの日かこのようなデジタル文学がカノンとなる日が来る，といえるかもしれない。

V　新しいケータイメディアにおける言語とリテラシー

テキストメッセージの言語に関する英語圏での議論（例えば Carrington 2005，Thurlow 2006）と，ここで起こっている現象との間には，共通点と相違点がある。共通点と思われる議論として，このような言語やその上で行われるコミュニケーションは「悪い」または「不適切」であるという点である。“My smmr HOS WR CWOT…”で始まる英文の例は，標準英語への「翻訳」なしにはその理解が困難な文書[10]で，そこには創造性はあるものの，理解されないため「悪文」とされる。この点は，ケータイ小説では，異なっており，理解に関わる難点が指摘されてはいない。仲間の読者だけでなく，一般市民にも完全に理解できる言語がケータイ小説で使用されている。ケータイ小説批判では使われている言語が，書きことばとしての規範と小説で使われることばとしての規範に照らした際，「小説」として不適切であるとされており，ここで再び文学とリテラシーに関するイデオロギーの絡み合う様を見ることとなる。

Barton（1994）は，リテラシーは，単に個人内に存在する「読み書き能力」を，意味するものではな

く，より広範な社会文化的文脈に位置している，という立場をとる。それは，“texts and the various ways of reading them are…the social and historical inventions of various groups of people”（Gee 2008：48）であるからである。リテラシーとは Street（1995）が述べているように “an ideological practice, implemented in power relations and embedded in specific cultural meanings and practices”（1995：1）であることから，「良い」「悪い」とする書き言葉について権威者が述べていることが，ケータイ小説に見られる言語使用に対する批判の合理化や正当化の背後にあるとみなす事ができる。

「未熟」とするケータイ小説批判は，確立した作家が持つリテラシーイデオロギーを示している。彼らにとって，話し言葉と書き言葉は異なるもので，前者には不完全な思考の断片が含まれており，書き言葉で使用することは不適当であるとしている。その議論では，もし，ケータイ小説が「小説」であるのなら，完結文をきちんとしたパラグラフに収める，等の散文の約束事に従うことが（少なくとも地の文で）期待されることになる。ケータイ小説は，会話としての小説へのアプローチを示し，テクノロジーの助けを借り，アマチュア，若者たち等誰もが行うことができる，というものを表している。ここに，既存小説への挑戦がある。Kress（2003）に従い，ケータイ小説は，社会的に劣勢な位置にある人々に対して，エリートや，高い教育を受け恵まれた人々にだけ属しているとされていた「著作者」の創造力とステータスへのアクセスや権利を与えている，と言えるのではあるまいか。

Ⅵ　おわりに

これまでに見てきたように，中学生の語彙と漢字能力であっても，ケータイ小説は依然として多くの読者に感銘を与えている。小説は洗練されたトピックとスタイルを使用すべき，という観念がある一方，ケータイ小説は難しい漢字で複雑な文章を読むことは好まないオーディエンスにアピールする。実際，ケータイ小説家，凜は，難しい漢字を使うと，「読んでもらえない」と阿部（2007）とのインタビューで述べている。上の分析で示したように，ケータイ小説の難易度は若手作家による既存小説と大差ないのであるから，ケータイ小説家は作品から読者と共に暗黙のうちに，支配的なリテラシーイデオロギーと文学イデオロギーを浮かび上がらせていると言える。

注

(1)　これらの作品は，以下から入手可能である。

1．http: //no-ichigo.jp/read/book/book_id/219907;
2．http: //ip.tosp.co.jp/BK/TosBK100.asp?I＝hidamari_book&BookId＝1&SPA＝200;
3．現在非公開中
4．http: //no-ichigo.jp/read/book/book_id/148920；
5．http: //ip.tosp.co.jp/bk/TosBK100.asp?I＝WildBeast&BookId＝1;
6．http: //pure.mainichi.co.jp/purple/ezweb/ashitanoniji/0.html
7．http: //no-ichigo.jp/read/book/book_id/240186。

⑵　引用には，対面会話，電話会話だけでなく，ケータイメールメッセージも含む。

⑶　和布蕪は京都大学と NTT コミュニケーション科学基礎研究所で共同開発された。<http:　//mecab.sourceforge.net/>からダウンロード可能。他のプログラム「茶豆」と UniDic は<http: //www.tokuteicorpus.jp/dist/index.php>から入手可能である。

⑷　ここでは文体特徴等を比較する際の全体的傾向をみているため，厳密な統計処理は行なっていない。

⑸　完結文は，寿岳(1979：29)が行っている「文の止めの分類」で，「通常止め」に相当し，断片文はそれ以外の分類（連用止め，連体止め，体言止め，その他止め）に当たる。

⑹　ケータイ小説 7 作品の内，『あたし彼女』は，文末にピリオドを置く表記を採用していないため，この作品は，文末表現分析及び文の長さの分析からは除外されている。

⑺　Crispin Thurlow の指摘による。

⑻　詳細は http: //kotoba.nuee.nagoya-u.ac.jp/sc/readability/obi.html 参照

⑼　比較のために使用した既存小説の選択基準を変更し，作家の生年や作品の出版年に関して異なる参照コーパスを用いたとすると，異なる結果が生じる可能性がある。

⑽　My smmr HOS WR CWOT... とは，Scotland の13歳の中学生が夏休みについてケータイ・テキストメッセージで書き，先生に提出した，とされるエッセイの冒頭部分である。標準英語に「翻訳」されないと，理解できないので，多くの新聞等で話題となり，議論をよんだ。以下に全文と標準英語訳を記す。

“My smmr hols wr CWOT. B4, we used 2 go 2 NY 2C my bro, his GF & thr 3:-@ Kds　FTF. ILNY, its gr8. Bt my Ps wr so {:-/ BCo 9/11 tht thay dcdd 2 stay in SCO & spnd 2 wks up N. Up N,WUCIWUG-- 0. I ws vvv brd in MON. 0 bt baas & ^^^^^”

標準英語訳　My summer holidays were a complete waste of time. Before, we used to go to New York to see my brother, his girlfriend and their three screaming kids face to face. I love New York, it’s a great place. But my parents were so worried because of the terrorism attack on September 11 that they decided we would stay in Scotland and spend two weeks up north. Up north, what you see is what you get － nothing. I was extremely bored in the middle of nowhere. Nothing but sheep and mountains.

参考文献

阿部秀明(2007)，「携帯小説は文学の夢をみるか」『週刊朝日』10月26日号 38-39.

岩淵悦太郎(編著)（1980)，『悪文』第 3 版 日本評論社.

石黒圭(2004)，『よくわかる文章表現の技術』I 表現・表記編 明治書院.

NHK（2007)，「手軽な文学? 携帯小説」『クローズアップ現代』9月27日放映.

樺島忠夫・寿岳章子(1965)，『文体の科学』綜芸社.

『國文學―解釈と教材の研究』(2008)「特集ケータイ世界」53.5.

国立国会図書館(2009)，『電子書籍の流通・利用・保存に関する調査研究』図書館調査研究リポート No.11. www.current.ndl.go.jp/files/report/no11/lis rr_11_rev_20090313.pdf

国立国語研究所(2009)，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』http：//www.kokken.go.jp/en/research_projects/kotonoha/bccwj/.

佐々木俊尚(2008)，『ケータイ小説家： 憧れの作家10人が初めて語る “自分”』小学館.

シラネ・ハルオ(1999)，衣笠正晃訳「カリキュラムの歴史的変遷と競合するカノン」シラネ・ハルオ, 鈴木登美編1999『創造された古典： カノン形成・国民国家・日本文学』394-437 新曜社.

シラネ・ハルオ(2009)，「カノン形成と民衆化の諸問題」シラネ・ハルオ編『越境する日本文学研究：カノン形成・ジェンダー・メディア』15-21 勉誠出版.

寿岳章子(1979)，『日本語と女』岩波新書.

杉浦由美子(2008)，『携帯小説のリアル』中央公論新社.

総務省(2009)，『情報通信白書平成21年版』http: //www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h21/index.html

トーハン(2007),「2007年 年間ベストセラー発表」http: //www.tohan.jp/cat2/year/2007_2/
七瀬恭一郎(2006),「ミリオンセラー作家 Yoshi の隠された素顔」『創』七月号18-27.
西村由起子(2010),「話し言葉, 書き言葉, そしてオンライン言語をめぐって：日本語全体像を捉える試みへのパイロット・リサーチ」『特定領域「日本語コーパス」平成21年度公開ワークショップサテライトセッション予稿集』73-84. 国立国語研究所.
日本記号学会(編)(2005),『ケータイ研究の最前線』 慶應義塾大学出版会.
ネウストプニー, J.V. (1981),「日本語の中の書き言葉の位置」林大,林四郎, 森岡健二編『現代作文講座 文章とは何か』213-250 明治書院.
野口恵(2010), 電話インタビュー 4 月30日.
花井愛子(2005),『ときめきイチゴ時代： ティーンズハートの1987-1997』講談社.
速水健朗(2008),『ケータイ小説的： "再ヤンキー化"時代の少女たち』原書房.
『文學界』(2008),「鼎談： 携帯小説は作家を殺すか」 1 月号 190-208.
本多勝一(2004),『中学生からの作文技術』朝日新聞社.
毎日新聞社 (編) (2009),『読書世論調査』毎日新聞社.
松木啓子(2005),「言語イデオロギーとディスコース研究：インタビューにおける二つの言語をめぐって」 片桐恭弘, 片岡邦好(編) 『講座社会言語科学 第 5 巻 社会・行動システム』2-16東京：ひつじ書房.
松田美佐, 岡部大介, 伊藤瑞子 (編) (2006),『ケータイのある風景： テクノロジーの日常化を考える』北大路書房.
繭 (2010),「人」インタビュー『毎日新聞』 1 月 9 日夕刊.
三宅和子(2005a),「携帯メールの話しことばと書きことば ： 電子メディア時代のヴィジュアル・コミュニケーション」三宅和子, 岡本能里子, 佐藤彰編 『メディアとことば 2 特集 組み込まれるオーディエンス』234-262 ひつじ書房.
三宅和子 (2005b),「携帯電話と若者の対人関係」橋元良明(編)『社会言語科学 第2巻 メディア』136-155ひつじ書房.
山崎敬一(編) (2006),『モバイルコミュニケーション： 携帯電話の会話分析』大修館書店.
吉田悟美一(2008),『ケータイ小説がウケる理由』 毎日コミュニケーションズ.
Barton, D. (1994). *Literacy: An introduction to the ecology of written language*. Oxford,UK & Cambridge, MA: Blackwell.
Carrington, V. (2005). Txting: The end of civilization (again)? *Cambridge Journal of Education*, 35.2: 161-175.
Chafe, W. (1982). Integration and involvement in speaking, writing, and oral literature. In D. Tannen (ed.). 35-53.
Clancy, P. M. (1982). Written and spoken style in Japanese narratives. In D. Tannen (ed.). 55-76.
Ensslin, A. (2006). Hypermedia and the question of canonicity *Dichtung-digital*, 36. Providence, Rhode Island: Brown University. Retrieved June 6 2010 from www.dichtung-digital.org/2006/1-Ensslin.htm.
Galbraith, P. W. (2009). Screen dreams: A digital-age literary form has become a publishing powerhouse. *Metropolis* Magazine 774, Retrieved February14 2009 from http://metropolis.co.jp/tokyo/774/feature.asp.
Gee, J. P. (2008). *Social linguistics and literacies: Ideologies in discourses*. 3rd edn. London & New York: Routledge.
Goodyear, D. (2008). I ♥ Novels: Young women develop a genre for the cellular age. *The New Yorker*. Dec 22. Retrieved June 13 2009 from http://www.newyorker.com/reporting/2008/12/22/081222fa_fact_goodyear?currentPage.
Guillory, J. (1993). *Cultural capital: The problem of literary canon formation*. Chicago: University of Chicago Press.

Ito, M., D. Okabe & M. Matsuda (eds.). (2005). *Personal, portable, pedestrian: Mobile phones in Japanese life*. Cambridge, MA: MIT Press.

Katayama, L. (2007). Big books hit Japan's tiny phones. *Wired*. Retrieved June 13 2009 from http://www.wired.com/culture/lifestyle/news/2007/01/72329.

Katz, J. E. & M. Aakhus (eds) (2002). *Perpetual contact*: *Mobile communication, private talk, public performance*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kress, G. (2003). *Literacy in the new media age*. London & New York: Routledge.

Kroskrity, P. V. (1999). Regimenting languages: Language ideological perspectives. In P. Kroskrity (Ed.), *Regimes of language*. 1-34. Santa Fe, NM: School of American Research Press.

Lakoff, R. T. (1982). Some of my favorite writers are literate: The mingling of oral and literate strategies in written communication. In D. Tannen (ed.). 239-260.

Onishi, N. (2008). Thumbs race as Japan's best sellers go cellular. *New York Times*. 20/01/2008. Retrieved September 18, 2008 from http://www.nytimes.com/2008/01/20/world/asia/20japan.html?_r=1

Rheingold, H. (2002). *Smart mobs: The next social revolution*. Basic Books.

Sato, S., S. Matsuyoshi, & Y. Kondoh (2008). Automatic assessment of Japanese text readability based on a textbook corpus. *LREC-08*. Retrieved March 5 2010 from http://kotoba.nuee.nagoya-u.ac.jp/sc/readability/obi.html.

Sebba, M. (2007). *Spelling and society: The culture and politics of orthography around the world*. Cambridge: Cambridge University Press.

Shirane, H. (2000). Introduction: Issues in canon formation. In Shirane, H.& T. Suzuki (eds.) *Inventing the Classics: Modernity, national identity, and Japanese literature*. 1-27. Stanford: Stanford University Press.

Silverstein, M. (1979). Language structure and linguistic ideology. In P. R. Clyne, W.F. Hanks, & C. L. Hofbauer (eds.) *The Elements*: *A parasession on linguistic units and levels*, 193-247. Chicago: Chicago Linguistic Society.

Street, B.V. (1995). *Social literacies: Critical approaches to literacy in development, ethnography and education*. London & New York: Longman.

Tagliamonte, S. A. & D. Denis (2008). Linguistic ruin? LOL! Instant messaging and teen language. *American Speech*. 83.1; 3-34.

Tannen, D. (ed.). *Spoken and written language: Exploring orality and literacy*. Norwood, New Jersey: Ablex.

Thurlow, C. (2006). From statistical panic to moral panic: The metadiscursive construction and popular exaggeration of new media. *Journal of Computer-mediated Communication*.11 667-701.

謝　辞

本研究は，文部科学省科学研究費基盤研究（C）「インターネット上の日本語及びその話者の言語行動に関する社会言語学的日英共同研究」（課題番号21520448）による補助を得た。また，ウェッブサイト「魔法のｉらんど」広報部，野口恵氏には，当サイト掲載のケータイ小説の本研究での利用に関して快諾をいただいたことを記して謝する。また，本稿は拙著 “Japanese *Keitai* Novels and Ideologies of Literacy”. Crispin Thurlow and Kristine Mroczek eds. *Digital Discourse: Language in the New Media*. 86-109. Oxford Studies in Sociolinguistics. Oxford: Oxford University Press（2011）を加筆・修正したものである。